
初めまして。

奈胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めまして。

【Nコード】

N6835E

【作者名】

奈胡

【あらすじ】

彼らが再び惹かれあつたのは、自分の力じゃ避けられないから。きつとそれが、恋だから。

「ここで、最新の治療を受けられるって聞いたんですけど――」

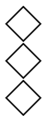
『記憶削除のことでしょうか』

「記憶、削除……？」

『忘れたいんでしょう？ 恋人と別れた事を』

「えっ でも……、ここって精神科じゃ？」

『そんな事、どうだっていいんですよ』



昨日、彼と別れた。

あんなに仲が良かったのに。あんなに幸せだったのに。

事の始まりは、たった一つの小さなピアス。彼の部屋のベッドの下で、儚げに光っていた。

「誰のよ、これ？」

どう見たって、あたしのじゃない。

「……なんだよ、これ」

知らない、と言い張る彼は嘘くさい。浮気してたんだ。

「別にいいんじゃない？ 悠斗、モテるものね。あたしなんかじゃ物足りないんだ」

ちょっと嫌味を言ってみた。ホントはずっと心配だったんだ、悠斗は本当にモテるから。

「んなこと言ってるねーだろ！」

荒々しい声を上げて、彼がピアスをゴミ箱に放り込む。

「じゃあ何なのよッ！」

ついあたしも、甲高い声を上げてしまった。

「だから 知らねえつつてんだろ」

彼はそう言い捨てると、諦めたようにベッドの端に座り込んだ。

買ってきたばかりのコンビニ弁当が、まだ湯気を立てている。ついさっきまで、手をつないで買物してたのに。

あたしはコンビニ弁当が食べられない。とくにこの『本格パスタ定食』っていうのはどうしてもダメ。小さい頃にこのお弁当を食べて吐き気がしたのが忘れられなくて、実は今でも匂いを嗅ぐのも辛い。

ところが彼はこのお弁当が一番好きみたいで、近所のコンビニに行くといつもこれを買う。

でもそんなところも含めて全部、あたしは彼が好きなのは嫌いなのに。

「本当に、知らないの？」

あたしがそう訊いたのは、ずいぶん時が経ってしまったあとだった。

気まずい雰囲気の中、どちらも何も言い出せずに しばらくの間黙り込んでいた。

「俺が信じられないか？」

「そうじゃないけど……」

彼はベッドに腰をかけたまま、上半身だけ倒して天井を仰いでいる。

「なあ。お前、本当に俺のことが好きか？」

一瞬、全身の血がさーっと引いた気がした。どうしてそんなことを訊くんだろう。

「ねえ、まさか——」

次の言葉を言い出す前に、彼が口を開いた。

「別れよう」

あたしを遮るように言い切った彼は、もうあたしの知っている悠斗じゃなかった。

「……うん」



あの時、どうしてあたしは頷いてしまったんだろう。どうして素直に頷くことができたんだろう。

——どうしてあたしたちは、別れてしまったんだろう。

後悔するのは、今でも彼を好きだからで。でも、あたしは彼を切り離れたという事実は変えられなくて。

その末に、あたしはここに辿り着いた。

『さて、どのように致しましょう？』

紹介された医師の前で、あたしは黙っていた。

あそこなら、最新の治療を受けられる。君の心の傷を、きっと消し去ってくれるよ。

そう言ったのは、初めてかかった精神科の先生だった。

なにも失恋で精神科にかかることはないけれど、この想いをとにかく誰かに聞いてもらいたかった。

友達じゃイヤ。のろけでしょ、ってバカにするし、悠斗を狙ってる女友達もたくさんいた。彼を狙うチャンスだなんて、絶対に思われたくないから。

家族にだって、今さら話すような問題じゃない。

カウンセリングなんて受けるほど、重大な問題でもない。

……精神科の先生なら、ゆっくり話を聞いてくれるかも。

精神科からの紹介だから、当然 精神科医が出てくるものだと思います。
ってた。

それなのに。

『彼女は私の友人なんですよ』

紹介されたのは脳科学の科学者のような研究者のような、まあどちらだって良いけど そんな人だった。

『はい、この装置をかぶって』

言われるが先か出てくるが先か、いきなり見慣れないモノを頭にかぶせられた。

「何ですか、これ……!？」

戸惑うあたしを横目に見ながら、その人は淡々と説明する。

『アナタの記憶を消し去るのです。イヤなこと、辛いこと、楽しいこと、嬉しいこと――』

「そんなの困りますッ！」

思わず叫んでしまった。すべての記憶が消え去ってしまうなんて聞いてない。

「あたしが消してほしいのは、彼の事と彼についての辛い記憶だけです！」

せめて幸せな思い出は、残しておいてほしいのに……。

『お嬢さん、そんな都合の良いことはできませんよ』

「えっ」

『そんなことのために、この装置を乱用してほしくないのでから』
確かに、便利すぎるのは良くないけど。

「でも……、今までの記憶が無くちゃ、生きていけないじゃない」

『それは心配ないですよ。この装置によって記憶が消されたという事と、生きていくために必要な基本的な知識は残せますから』

「……お願いします」



お腹が空いた。

最近、近所のコンビニの『本格パスタ定食』にハマっている。

レジで温めてもらって、いい香りを嗅ぎながら家に帰るのが好き。
アツアツのうちに食べるのが好き。

さっき財布を探しているときに、レジの男の人に話しかけられた。
「キミ、いつもこれ買っていくよね。そんなに好きなの？」

「うん。大好き」

同じ年くらいに見えたのか、それとも本当に同じ年なのか、彼は気さくに話しかけてくれた。

黙っていてもかっこいい人だった。それでいて笑顔も魅力的で、そのギャップに惚れ惚れした。

だけどそれ以後、彼はコンビニから姿を消し、逢うことはなくなった。

――もう一度、彼に逢いたい。

気づけばそう思っていることが多くなった。ろくな話をしたワケじゃないけど、彼の何を知ってるってワケじゃないけど、とにかくそう思う自分がいる。

「すいませんっ。ちょっとごめんなさい」

大学からの帰り道。人の波をかき分けて、ホームを走る。ブザーが鳴っている。早くしないと発車してしまう。

「あー、待って！」

ギリギリのところで電車に滑り込んだ。もうドアは閉まりかけていたかもしれない。

＜駆け込み乗車は おやめください＞
車掌さんのアナウンスに、なんだか申し訳なくて 一人でこっそり頭を下げる。

隣でクスツと笑う声が聞こえた。

……もしかして、見られてたのかも。そう思って頭を上げるよりも先に、彼に声をかけられた。

「ねえキミ、どっかで会ったよね？」

「あ……！」

何も言えずにポカンと見つめるあたしを見て、また彼は笑った。

「覚えてないの？ ほら、あのときの――」

忘れるはずがない。ずっと探していたんだもの。彼はあのときの……！

「コンビニ！」

ふたり同時に口にして、思わず吹き出してしまった。

「ずっと会いたいと思ってたんだ」

笑ったままのあたしの耳に、ちょっと照れたような声が響く。

「あたしも」

「あらためて、初めまして。俺、高橋 悠斗」

あ、ほら。あたしの好きな笑顔。

「実は俺さ、ちょっと前に記憶を消し去ったんだ……」

（後書き）

連載の息抜きに、不思議なお話を書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6835e/>

初めまして。

2011年10月4日13時02分発行